
2人きり

たまと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

2人きり

【NZコード】

N9193B

【作者名】

たまと

【あらすじ】

元恋人同士のナツキとタツキ。2人きりの教室で久しぶりに会話をした2人。だけど2人は……

「アホだね。」

「うん、アホだ。」

二人はお互に納得した。

それもそのはず。二人は、休校日に登校した。

ナツキとタツキ。偶然にも名前が似た二人の関係は、元恋人同士。

「あれ？」今日何の日だけ？」

ナツキが嘆く。

「知つてたら、ここにいない。」

「だよねえ。」

「……」

気まずい沈黙。二人は一か月前に別れてからろくな会話を交わさなかつた。

久し振りの会話だつた。

付き合つてて頃と変わらない会話だつた。

「そろそろ帰る？」

「え？」

突然のタツキの言葉に不意を突かれるナツキ。

「だって、ここにいても何もすることないでしょ。」

「あ、うん、そうだね。」

帰る準備をするタツキ。それをただジーと見てるナツキ。

「何？」

タツキが言った。

「何？って何？」

「いや、だつて何か言いたそうに」いつか見てるから。

「別に何でもない。」

「あ、そう。」

再び帰る準備をするタツキ。

「タツキ。」

「何？」

「せつかく、久し振りに一人きりなんだから何か話さない。」

「何で？もうナツキは俺の彼女じゃないでしょ。」

「別に彼女じゃなくとも、話すことはあるでしょ。」

もつともな考えだ。

「ああ、そうだな。妙に意識しすぎた。」

何気無い顔つきでタツキは言った。

「タツキ、最近どう？元気？」

ナツキのどうでもいい質問。

「同じクラスにいるから、それくらいわかるだろ。」

「人の内面は見ただけじゃ、わからないよ。」

「…………そうだな。元気ではない。」

少し淋しげな声で返答をしたタツキ。

「ナツキは？」

「私も元気じゃない。」

「…………」

「…………」

再び沈黙。

お互い元気がない理由などわかつてゐる。
痛いほどわかつてゐる。

「タツキ、恋してゐる？」

「しない。俺の心はそんな器用にできない。」

「そり……」

「……」

「……」

こんな何回も沈黙が続くほど氣まずい」とはない。ナツキは冷や汗を流した。

「やつぱ、俺帰るわ。」

既に私物を全部入れた鞄をタツキは肩にかけた。

「タツキ、待つて！」

「待たない！」

予想外の大きな声に驚くナツキ。

「……何で？」

今にも泣きそうな表情で尋ねるナツキ。

「ナツキは、やり直したいと思ってるでしょ？」

「タツキは、そう思わないの？」

「思つたよ。だから待たない。」
「やり直したらまた繰り返しじやないか。」

「……」

「二人で決めたことじやないか。お互い別の道を頑張りつつで。」

「だけど……」

「だけどじやない！お互い登校する時間帯もずらした。おやろいのストラップも外した。出来る限り一緒に空間にいないようにしてゐる。やつと口々まで振り切つたのに……」

「……ぐす」

涙を流すナツキ。

「泣かないでナツキ。来世はきっと…」

愛し合つてる一人。

タツキが男だったらどんなに救われただろうか。

性同一性障害のタツキ。

レズビアンのナツキ。

二人は別々の道を歩くことを誓つた。

そして、来世はきっと……と願つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9193b/>

2人きり

2011年1月12日15時33分発行